

コア・アフェクト理論の再検討

——Russell の円環モデルまでさかのぼって

西田 文香 (Fumika Nishida)

株式会社 Poetics

感情とは何かという問いは、古くは古代ギリシアの哲学者によって、現代では哲学、心理学、神経生理などの分野において探求されている。心理学における議論には対立する2つの立場があり、それぞれ基本情動説 basic emotion theory と構成主義的情動理論 the theory of constructed emotion (心理構成主義; 心理学的構成主義とも呼ばれるが、本稿では Barrett 2017 の著書における表記にならう) と呼ばれている。

基本情動説では、人間には生得的に、また文化を超えて普遍的に、喜怒哀楽などの情動が備わっていると考えられる。代表的な論者としては、アメリカの心理学者 Paul Ekman が挙げられる。Ekman が実証したのは、国や文化の違いを超えて、人々は意図して作られた表情に関連する情動語を一致させることができるということである。このように文化が違っても人間はどのような表情がどのような情動を示しているのかを認識できるということから、人間には普遍的に基本情動が備わっていると主張する(表情からの感情研究はたくさんあるが、たとえば Ekman 1992)。

一方で構成主義的情動理論では、特定の情動に対応する脳部位や神経回路の存在を支持せず、特定の情動と特定の表情が結びついているという主張についても、メタ分析の結果をもとに否定する。喜怒哀楽などの固定的な感情のカテゴリを仮定する代わりに、構成主義的情動理論では情動の知覚においてコア・アフェクト core affect の形成と概念化という過程を重視する。コア・アフェクトとは、発汗や心拍数といった身体内部についての知覚である内受容感覚からの入力をもとに、快と不快(感情価 valence と呼ばれる)、および覚醒の度合いという2つの要素によって主観的に経験される感覚である(コア・アフェクトに関する主要な文献として、Russell 2003; Barrett and Bliss-Moreau 2009)。コア・アフェクトについての情報と、光や音、皮膚刺激などの外受容感覚から脳に入力された情報は、それまでの記憶や言語をもとに解釈され、分類される。これが概念化のプロセスである。こうしてコア・アフェクトと外受容感覚が概念化されてはじめて、自身の心的状態や外界の対象物に対する感じとして情動が主観的に知覚され、情動語による意味付けがなされる。

心理学の歴史上、構成主義的情動理論は基本情動説を批判するかたちで提案されたものである。2つの立場が対立している争点には、喜怒哀楽といった情動の個別のカテゴリが自然種であるかどうか、そしてそうした情動のカテゴリが自然種でないならば科学探求の対象にするべきではないのではないかという素朴心理学の消去についての問いがある(太田 2020)。情動の構成主義者は、基本情動が自然種であることを否定し、コア・アフェクトや概念化という原初的な心理的過程 psychological primitive

こそが自然種であり、科学的に検証されるべきものだと主張する。そして、原初的な心理的プロセスに対応する脳内の神経回路や部位を特定することでその実証しようとしている（それらの研究のレビューとして、Lindquist and Barrett 2012 がある）。そうして情動の構成主義者は、一部の基本情動のカテゴリが情動科学から消去されるべきだと考える。

しかしながら、情動の構成主義者が科学的な議論の対象としているコア・アフェクトを形成する「快」「不快」という感情価という感覚もまた、素朴心理学的なカテゴリを「流用」して構想されているものである(太田 2020: 48)。さらに、コア・アフェクトがなぜ（他の何らかの神経生理学的な感覚ではなく）感情価と覚醒度合という（1つや3つ以上ではなく）2つの感覚から経験されるのかという問いについても、コア・アフェクトの理論を強調する情動の構成主義者は応答する必要がある。

本発表の目的は、コア・アフェクト理論に対する上記の批判点と批判されるべき理由をより鮮明にすることである。そのために、コア・アフェクト理論の提唱者の一人である James A. Russell の心理学研究における感情の円環モデル(Rusell 1980)というアイデアにまでさかのぼって、このモデルとコア・アフェクトとの関連を詳細に検討する。

参考文献

- Barrett, L. F. (2006) Are Emotions Natural Kinds? *Perspectives on Psychological Science*, 1(1), 28-58.
- Barrett, L. F. and Bliss-Moreau, E. (2009) Affect As A Psychological Primitive. *Advances in Experimental Social Psychology*, 41, 167-218.
- Barrett, L. F. (2017) How Emotions Are Made : The Secret Life of the Brain. London: Macmillan. [邦訳：高橋洋, 2019『情動はこうしてつくられる：脳の隠れた働きと構成主義的情動理論』紀伊国屋書房.]
- Ekman, P. (1992) An Argument for Basic Emotions. *Cognition and Emotion*, 6(3-4), 169-200.
- Lindquist and Barrett, L. F. (2012) A Functional Architecture of The Human Brain: Emerging Insights from The Science of Emotion. *Trends Cogn Sci*, 16(11): 533-540.
- 太田陽 (2020) 「<サーヴェイ論文> 基本情動説と心理構成主義」. *Contemporary and Applied Philosophy*, 11: 23-57.
- Russell, J. A. (1980) A Circumplex Model of Affect. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39(6), 1161-1178.
- Russell, J. A. (2003) Core affect and the psychological construction of emotion. *Psychological Review*, 110(1), 145-172.